いもうと

ましたさかな

side A

いったい何時までケイタイしてるつもりだ、あいつは。
明日は結婚式だって言うのに！

この３Kの小さなアパートじゃ、ふすま越しに何でも聞こえてくる。
クルマや電車が頻繁に通る夕方まではそうでもないけど、
夜中を過ぎたら寝息だって聞こえるぐらいだ。

いくら身内と、ほんとに近い友達しか来ないって言っても、
花嫁の目が腫れてたらシャレにならんだろ。
ほんといい加減にしろ！って、
一度ぐらいは怒鳴ってみるべきだったかな。

甘いんだよオレは、あいつに。みーんなそういうもんな。

なんだかなあ。
明日のこと考えてたら、寝れなくなったなあ。
ちょこっと飲んでから、も一回寝るか。

冷蔵庫に、、、、あったあった。
おいおい、明日から一人だぜー。なのに、なんでこんなに食い物が
詰まってるんだ？
しょうがねえなあ、全く。

パックからコップに入れて、電子レンジで３０秒、、、だっけ。
こんなことすら自分でやってないものな。

ちーん！

出来ました。
がっちゃん。

戴きます、、、あちゃー、ぬるー。

「起きたの？」
香澄ー。起きたのじゃねーだろー。

「なんだか、寝れなくてな。」
「緊張してるんだ。」

あああ、ふすま開けて、出て来ちゃったよ。
「飲むか？」
「うん、一口だけ。」
ま、いっか。最後の夜だもんな。

「誰と話してた？」
「うん？　ああ、のりちゃんと。ブーケくれって。」
のりちゃんか。

あれ？
「あの子、独身だったっけ。お前よりよっぽど先に
　行っちゃいそうな、いい子なのに。」
「失礼だなあ、このアニキは。
　それと独身じゃないと、そうそうウチには遊びに来れないよ。」
まあ、そりゃそうだな。
あの子が来ると賑やかなんだよな。

「この家も最後だなあ。オジサんち出て１０年だっけ。」
そんななるかなぁ。
オレが高校でて、就職してすぐだったな。

オジサンちにも子供が二人居て、なんとなく気詰まりで。
居たたまれなくて。
世話になって半年だった。
おばちゃんには最後まで引き止められたけど。

あれから１０年か。
むちゃくちゃ働いたけど、つらいって気持ちは一度も無かったな。

でも、こいつには、あまりいい思いさせられなかった。
一番おしゃれしたいときに、ろくに服も買ってやれなかった。
結局、家事は全部こいつに任せっきりだった。
情けねぇアニキだった。

「にいさん。」
なんだよ、座り直したりして。

「お前、それはやめろよ。」
「ええ、なんでぇ？」って。語尾上げるな。
「こっぱずかしいだろうが、オレが。」
「そんなぁ、駄目だよう。ちゃんとしようよぅ。妹の為だと思って。」

ち、しょうがねえなあ。座り直しますか。

「にいさん。　今日まで私を育ててくれて、ありがとう。」
「何にもしてやれなくて、悪かったなぁ。」
「そんなことないよ。私、すっごく幸せだった。」
「明日っから、もっと幸せになれ。」
「うん。本当にありがとう。」

泣くなよ、っていっても無理か。
二人だけの家族だもんな。

でも、あれだけ泣いたら、すっきり眠れるだろう。
オレはもう一杯飲んでから。

おっとっと、入れすぎた。

オレ一人だと、このアパートもスカスカだなあ。
引っ越すかなあ、もっと狭いとこに。

あ、あのみそ汁の作り方、聞くの忘れた。
ま、いいか、明日で。

side B

終わったー。
ひょっとしたら泣くかと思ったけど、、、。

「お兄ちゃん、長い間ご苦労さま。いい結婚式だったねー。」
って、おばさん、オイオイ泣くんだもんなあ。

「ダイチ、今度はお前の番だぞ。」
って、オジサン勝手に決めんなよ。

「そんなの、まだまだだよ。オレ、女の人と付き合ったことも無いし。」
「お見合いする？　写真持ってこようか？」
「おばちゃん、パンフレットじゃないんだから。」

まったくもう。
けど結婚とか、考えたことも無かったなあ。

「おにいさん。これからよろしくお願いします。」
「誰がお兄さんだよ。」
このよっぱらいがー。顔真っ赤だぞ。

「だって。今日からカスミちゃんの夫ですよ、オレー。」
「お前は駄目だ。これからもオレのことは高瀬さんと呼べ。」
「えー、そんなぁ。」
そんなもクソも有るか。
会社と家ででややこしくなるだろ。
仕事中にお兄さんとか言われたら、鳥肌が立つ。

つか、ちょっとそっとしといてくれないかな。
ようやく肩の荷が下りたって感じなのに。

「おにいさん。」
ん？
「ああ、ノリちゃん、今日は来てくれてありがとう。
　ブーケもらったんだ。」

「はい。今度はノリの番だよって、くれました。」
そうだよなあ。

「ノリちゃんだったら、可愛いし、引く手あまただろう。」
「えー、ほんとにそう思います？」
「ほんとほんと。」
「じゃあねぇ。」

お、なんだなんだ。ケイタイ？
ひょっとして彼氏の写真か？
顔、まっ赤っかだなぁ。

「ハイっ！」
はいって、なんだこの写真、じゃなくて、メール？
「カスミに、あのみそ汁の作り方、教えてもらいました。」
へ？

「男の一人暮らしで心配だから、、、、家事出来ない人だから、、、、
時々、、様子、、、見に行ってやってくれって。カスミが。」

・・・・・・・。
「行っても、いいですか？」
「はい、、、よろしくお願いします。」

、、引っ越しなんか考えてる場合じゃねー。

真下魚名の既刊

黄昏の王国　第１回～第３回

ー　僕カノシリーズ　ー
「僕が彼女に殺された理由（わけ）」

「僕と彼女の選択の事由（わけ）」

「僕と彼女はそれしか答えを見つけられなかった。」

「僕と彼女はそれでも答えを探し続ける」

「僕と彼女と複雑な関係者たち」

「僕と彼女と単純な関係式」

「僕と彼女と校庭で」

「僕と彼女と校庭で　夏」

「僕と、彼女のアリア」（次回）

ー　その他　ー
サマータイム・ブルーズ

危険なドライビングマジック

デフラグメント

インフルエンス　あのころの僕たち

花舞い、名残り雪